

千葉県市川市大町自然観察園、湿地堆積物の花粉分析

叶内 敦子

1. はじめに

市川市北国分の堀之内貝塚では、道メキ谷津で1989年10月11日にボーリング調査が行われた。堆積物の年代測定と花粉分析結果から、周辺の縄文時代以降の植生変化と稲作の関連が述べられた(杉原ほか、1992)。市川市大町自然観察園内では、1991年4月30日にボーリング調査が行われ、堆積物の年代測定結果が報告された(杉原、1997)。堆積物は良好な状態の泥炭であった。本報告では、採取した中で最も長い540cmのボーリングコア(コア名: ohM-1)の花粉分析を行った。得られた分析結果から大町自然観察園周辺の古植生について述べ、市川市北部の約5,000年前以降の植生と古環境を、より詳しく解明するための一資料としたい。

2. 調査地

大町自然観察園(千葉県市川市大野町4丁目)は、大柏川の樹枝状谷の一つで、長田谷津と呼ばれている。関東地方では台地を刻む細長い谷地形を谷津、谷戸などと呼び、台地からの地下水に涵養される谷底は、水田として利用されてきた。ohM-1の採取地点は、谷底低地内の北緯34°45'47"、東経139°58'20" (日本測地系)、標高11mである(図1)。

市川市は、関東平野南部の暖温帯に位置し、潜在的な自然植生帯はシイ・カシ類が優占する常緑広葉樹林帯に相当する(宮脇編著、1986)。調査地周辺の現在の植生は、標高25m前後の台地上はナシなどの果樹園、

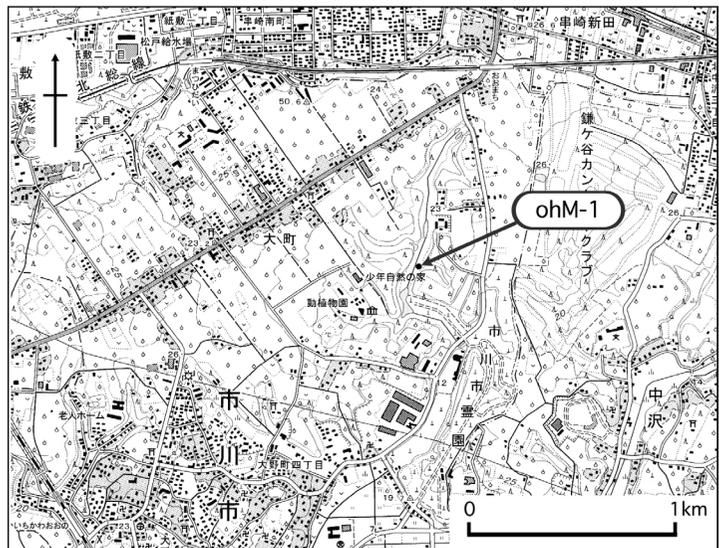


図1 調査地点 国土地理院発行2万5千分の1地形図「松戸」。●はボーリング地点(ohM-1)。